

⑨ 「長崎大学五十年史・局史篇・経済学部」同史刊行委員会編を読む

平成11年3月刊行の「長崎大学五十年史」から「局史篇・第2章・経済学部」(P298-337)を読む。刊行委員会の経済学部委員は都野尚典教授。本書は「長崎大学35年史」以降に学校側が編纂した直近の公式記録であり「第2章・経済学部」の内容は5節に区分される。即ち「第1節・経済学部の歩み」「第2節・教育研究活動」「第3節・同窓会」「第4節・経済学部の将来展望」「第5節・資料」(卒業生の進路状況(S27-H9)・教官定員・現員表(S24-H10)・歴代教官一覧(S24-H10))。先ず「第1節・経済学部の歩み」では次の(1)―(7)項目を掲げる。

(1) 「経済学部の発足」では―①学部規定の制定・②単科大学昇格運動と学部への道・③一般教養課程の分離・④学部内諸規定の制定など・⑤商科短大・経済学専攻科の設置・⑥東南アジア研究助成金の支援・⑦関西での入学試験の実施―が語られる。続いて昭和39―41年の(2)「文教地区への移転問題」。(3)番目は新時代に対応する「学部組織拡充の取組み」について―①貿易学科の新設・②経営学科への改組。(4)番目「施設の拡充と整備」―①校舎の改築・②学部図書館・③体育館・④扶搖会館⑤大講義室・⑥片淵地区共用研修施設。(5)番目は「貿易学科のファイナンス学科への改組」―①審議過程・②大学科目制とカリキュラム改正・③教員選考制度。(6)番目の「大学院経済学科・コース制の設置」では―大学院設置構想の転換と教官定員不足に苦悩し続けた本件の推移が、①経緯・②人事基本委員会・調査委員会の設置・③大学院開設につき語られる。続いて(7)番目「学部改組―総合経済科へ」―平成9年10月、学部は従来の3学科7大講座制を、総合経済学科の1学科6コース・昼夜開講制に転換した。6コースとは、経済分析と政策・経済と法・国際関係・ファイナンス・経済経営情報・経営と会計の各コースであり、本節は①検討経過・②総合経済学科へ・③総合経済学科・コース制の始動につき要説する。

「第2節・教育研究活動」では、前節に対応した教官側の動き(①学科の変遷と運営・②総合経済学科・コース制・③大学院経済学研究科・④研究活動・⑤図書館・⑥電算・情報処理教育・⑦国際交流・留学生教育と並べて記述される。また「第3節・同窓会」では、昭和47年の「旧研究館」を改修した「瓊林会館」設置、昭和60年の「東南ア研究交流募金、同窓会誌「瓊林」等に触れる。

最後は「第4節・経済学部の将来展望」について本書は次の4項目を挙げる。①特色ある教育研究の推進―21世紀が求める実践的エコノミスト育成のために、従来のサプライサイドの教育からデマンドサイド教育へ「1学科・6コース制」の実施。②国際化・情報化に対応した教育研究の推進。③地域社会に密着した教育研究の推進。④今後の教育研究体制の改革について。歳月の歩みは早く、以降今日まで既に15年が経過した。本学部の「将来展望」は、如何に推移し変貌したのであろうか。(04/7)

☆本書の周辺☆ 母校百年史を持たないのは長崎と山口だけ(滋賀大経・A教授)と言う。母校94年目の本書は苦悩に充ち、未来への展望が不透明。叙述は母校への深い配慮を伴っての冷静な運筆であるが。

